

ガラテヤ書3章1-14節 「信仰と律法」

1A 律法に戻ることの愚かさ 1-5

2A アブラハムの信仰 6-9

3A 律法からの贖い 10-14

本文

ガラテヤ書3章です、1節から14節までを見ていきたいと思います。3章から、パウロは本論に入ります。ガラテヤの信者たちが、割礼派とも呼ばれるユダヤ主義者らの教えに従っていていることに対して、パウロは何を深刻に思っているのか？すでに、前回、ペテロがアンティオキアの教会で、異邦人信者との食事の席から、後ずさりしたことで、はっきりと抗議した言葉にも出てきました。2章21節ですね、「私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」律法によって義を得ようとしている。それをやったら、神の恵みは無になる。そして、キリストの死は無になるということです。

私たちは、人間的には、「少し付け足しただけで、そんなに深刻に考えなくていいんじゃない？」と誤ってしまいます。「主が成し遂げてくださったことを信じて、それだけではちょっと足りない。だから、きちんと割礼を受けて、モーセの律法を守ってユダヤ教徒となったら救われるというなら、それでもいいんじゃない？」と誤ってしまいます。けれども、それはとんでもない間違いで、神の恵みの福音が完全に台無しになってしまう。キリストが死なれたことが完全に無駄にされる、ということなのです。このことについて、パウロは3章また4章で徹底的に教えていきます。

1A 律法に戻ることの愚かさ 1-5

¹ ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。

パウロはいきなり、「ああ、愚かなガラテヤ人。」という言葉を使っています。相手に対していう言葉としては、かなり強烈ですが、とても強い言葉ですが、それだけ深刻なのだということを言い表しています。思えば、パウロは、ガラテヤ人への手紙で、他の教会に対する手紙とは異なり、挨拶においても主にあって祝福する言葉がありませんでした。突然、本題に入っていました。なぜなら、すべての祝福の源から、彼らが自分たちを引き離してしまっているからです。恵みによる救いの真理から離れてしまっていたからです。けれども、彼らのことを「兄弟たち」と呼んでいます(4:12)。ですから、救いを失ったということではないんですが、離れてしまっているのが、困り果てています。

そして、ここの「愚か」というのは、知恵遅れのような愚かさ、馬鹿だという言葉ではなく、「考え

れば分かるものを、なぜ考えないのか？」という嘆きに近い意味合いです。例えば父親が、息子が誰かを傷つけて警察に捕まったら、「馬鹿者！お前はなんということをしたのか？」と怒っている時のような、そうした言葉です。

そして、ガラテヤ人たちが「十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出された」とパウロは、言っています。目の前にはっきりと示されていたとあります。まるで、十字架に磔にされている場面が、映画を見ているかのように視覚で見えたのでしょうか？あるいは、信仰によってまざまざと、その情景を見ていたのでしょうか。いずれにしても、目の前に描き出されたのです。コリント人への手紙第一に、パウロはこう書いています。「2:2,4 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。…4 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」パウロが語ったのは、十字架の言葉でありました。そして、それ以外は説得力のある言葉を使いませんでした。しかし、御霊が力強く現れて、十字架のキリストを目で見るようにはっきりと知らせたのです。

そして彼らは、そこまでの体験をしたのに、「だれがあなたがたを惑わしたのですか」と言っています。この言葉は、「まるで魔法や催眠にかかったかのようになってしまった」という意味合いがあります。パウロは、彼らがあまりにも容易く、速やかに福音の真理から離れてしまった、衝撃を受けて、どうしたらよいかと悩んでいるのです。

² これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。

使徒の働きには、数多く、御霊を受けた人々が出てきます。聖霊が弟子たちに下って、それでペテロの説教を聞いたユダヤ人たちの心が刺されました。ペテロは答えました。「使徒 2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」そして、サマリア人たちがピリポの福音宣教によって、主イエスの御名を信じました。そしてエルサレムから使徒たちが遣わされて、彼らに手を置くと、彼らが聖霊を受けました(8:17)。それから、異邦人である百人隊長コルネリウスがいます(使徒 10:44)。これと同じように、ガラテヤ人は福音を聞いて、キリストの十字架がはっきりと示されて、そして信じて、そして同時か、あるいはその後で御霊を受けたものと思われます。

そして大事なのは、それが律法を守っていたから受けたのか、それとも信仰をもって聞いたからなのか？ということにあります。もちろん、後者です。信仰をもって聞いたから、それで御霊がお降りになったのです。コルネリウスがまさにその証しでした。彼は異邦人です。確かに神を恐れている人でした、祈りも捧げていました。けれども、割礼は受けていなかったし、ユダヤ教に改宗してい

なかったのです。ペテロの福音の言葉を聞いて、それを信じたからこそ、聖霊を受けたのです。

ここで何が言いたいのでしょうか？「私は、これこれをしなければ、クリスチャンの祝福にあずかれないのではないか？」と考えることは間違っているということです。自分が十分に罪深い、至らない、この状態ではやっていけないと思っていて、「ある程度、しっかりしてから、信仰告白をして洗礼も受けようか。」と考えているのであれば、そうではない、ということです。それでは、御霊による祝福は受けることはできないのです。

そうではなく、自分の心をそのまま神の前に持っていき、ありのままの自分を神に見ていただき、そのままのあなたで神のところに行きます。問題は、きちんとできてないということではないのです。そうではなく、きちんと素直になれていない、ということなのです。これまで、いろいろな服を自分に着せて、これが自分だと思わせて歩んできました。けれども、キリストの十字架は、自分はキリストを十字架に付けるほどに罪深いのだと明らかにします。このことが認められないので、キリストの所に来ることができていないのです。問題は、自分の行ないがきちんとできていないではなく、悔い改めて信じていないということでもあります。「何かをして、それから信じる。」のではなく、「そのまま信じて、それから主が何とかしてくださる。」なのです。

³ あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。

ガラテヤの信者は、御霊によって始まりました。御霊によって始まるというのは、信仰によって始まることです。自分が何かを神の前で達成したのではなく、神がキリストにあって救いの備えを成し遂げてくださったので、それを受け入れて信じたから、聖霊が働いてくださっています。ところが、彼らは、これからは、自分たちの律法の行ないで神に認められるようにしていったのです。それが、「肉によって完成される」ということです。多くの人は御霊に満たされることを願いますが、御霊のうちに留まることはあまり考えません。信仰によって始まったのだから、信じる場所に留まるのです。そうすると御霊が働き、御霊が事を成し遂げてくださいます。

6 節から、アブラハムが神を信じて、義と認められるところを読みますが、それは、彼に子孫が与えられて、星の数のように与えられることを約束されたからです。けれども、何年経っても子が生まれません。子孫が星のようになるという途方もない約束を受け取りましたが、まだ一人も生まれていません。それで妻のサラが、自分の女奴隷ハガルを与えます。「創 16:2 サライはアブラムに言った。「ご覧ください。【主】は私が子を産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう。」アブラムはサライの言うことを聞き入れた。」しかし、これによってイシュマエルが生まれますが、ハガルが高ぶりました。サラがアブラハムに行って、彼女を追い出してもらいました。しかしハガルは主の使いに会い、ま

たアブラハムの家に戻ります。つまり、お家騒動が起こったのです。そして、サラ自身が後にイサクが生まれます。イシュマエルはイサクをいじめます。結局、ハガルとイシュマエルは追放されます。そして、主はイシュマエルを、アブラハムに約束された子とは数えておられないのです。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて(創世 22:2)」とされています。

このように、神に約束されたものを信じて、そして御霊が働かれるのに、その働きを自分の肉で完成しようとする過ちをアブラハムは犯しましたし、そして私たちも犯します。

⁴ あれほどの経験をしたのは、無駄だったのでしょうか。まさか、無駄だったということはないでしょう。

パウロは、「無駄だった」という言葉をしばしば使いますね。これは、主にあって建て上げられるのではなく、主から離れてしまうことを意味します。4章11節でも同じ言葉を使っています。「私は、あなたがたのために労したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています。」それを彼は、「4:19 私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。」と語っています。子供として大人に向かって成熟するのではなく、なんと再び誕生しなければいけないような状況になっている、ということです。

⁵ あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で力あるわざを行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなるのでしょうか。それとも信仰をもって聞いたから、そうなるのでしょうか。

使徒の働きでは、パウロとバルナバが宣教旅行をしている時に、例えばリステラでは、足の不自由な人が飛び上がり、歩き出しました(14:10)。このような力あるわざを、神が彼らの間で行ってくださったのです。それは、ただ信仰をもってみことばを聞いていたからそうだったのであって、割礼を受けたり、安息日を守ったりして、御霊による力あるわざが現れたわけではありません。言い換えれば、自分がある程度の霊的状态に達したから、力あるわざが起こったわけではないのです。

ですから、私たちは問わないといけません。「なぜ、自分は祝福されないのだろうか？」神の祝福を十分に受けていないと感じる時に、それは自分が十分に祈っていないから、ではないのです。そうではなく、主がおられること、この方が祝福したいと願っておられること、このことを信じて、喜んで受け入れていないから、そうになっているのです。神が祝福されるということを信じていないから、祝福されないのだから、自分ができていないから祝福されないではありません。

2A アブラハムの信仰 6-9

そこでパウロは、聖書に示されている神のご計画を教えてください。

6「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあるとおりです。7 ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい。

ユダヤ人にとって、アブラハムの子孫であるということは信仰の根幹をなしていました。なぜなら、神が人に祝福を約束され、初めの人アダムが罪を犯して、呪いの中に置かれたことが、アブラハムに対して、祝福の約束を与えられたからです。しかしユダヤ人は、その一部しか受け止めていませんでした。「創世 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。」と言われました。大いなる国民にするとされたところは見えていました。けれども、次の 12 章 3 節にまで考えが及んでいませんでした。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」アブラハムの子孫が、一つの大きな国民、すなわちイスラエルになるということだけでなく、地のすべての部族、すべての人への祝福になる人だったのです。これをパウロは、解き明かしていきます。

ユダヤ民族だけに祝福が留まっていた考えを彼らが持っていたので、イエス様と彼らが議論した時も、こんな議論をしていました。「ヨハ 8:33 私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」と反論しています。アブラハムの子孫だということで、自分は神の国に入るのだと思っていたのです。主はアブラハムと契約を結び、割礼がその契約の印であると命じられました。したがって、ユダヤ人は血縁関係で自分たちがアブラハムの子孫であるからこそ、神の国に入れると信じていました。

しかし、パウロはその主張に対して、直球で勝負します。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」と言っています。アブラハムは、彼が神に義と認められたのは、彼が何らかの自分の義を積み上げたからではなく、神を信じたからそうだったことを思い起こさせています。星を神が彼に見せて、子孫がこのようになると言われて、アブラハムは主を信じました。それが義とみなされたのです。大事なことは、このことはアブラハムが割礼を受けるように命じられる前に起こった出来事です。つまり、アブラハムがまだ無割礼であった時に、つまりまだ異邦人であった時に、彼は義と認められていました。つまり、神に認められるその基準は、割礼の有無ではないことが分かります。その要素は、あくまでも「神を信じた」というところにあるのです。そこでパウロは、「信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい。」と言っています。

ただし、血縁関係によるアブラハムの子孫、ユダヤ人との関係がなくなったということではありません。そのことについては、ローマ 9 章から 11 章において、血縁関係によるアブラハムの子孫、イスラエル人についての神の取り計らいについて書いてあります。彼らは決して見捨てられたのではなく、今もその選びと召命は変わっておらず、主は終わりの日に彼らを救われます。しかし、それであっても彼らも信仰によって義と認められなければなりません。

そして、「義と認められる」ということも私たちは、その関係が不思議であります。義というものが、神からの賜物として与えられる、難しい言葉を使うと「転嫁される」のです。自分自身にある義ではなく、神ご自身の義が私たちに贈り物のようにしてあたえられるのです。私たちは、自分自身が正しいことをしたことが義であると考えますが、そうではなく、神ご自身が義であり、神がキリストにおいて行われたことを信じることで、その信仰が義とみなされるのです。神の恵みなのです。義人ではないのに、義人であるように神の恵みでみなされます。キリストにあってみなされます。このことをいつも思い出すべきですね。私たちは不足を感じる時、不完全を感じる時、それでも完全な神は私たちを完全な者としてみなしておられるという事実です。この矛盾を解決する方法は、神の恵みです。そして信仰です。神に信頼を置き、神のなされることを見ていくこと、ここに注目します。

⁸ 聖書は、神が異邦人を信仰によって義とお認めになることを前から知っていたので、アブラハムに対して、「すべての異邦人が、あなたによって祝福される」と、前もって福音を告げました。⁹ ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです。

異邦人について、アブラハムに対する祝福は、イスラエルに留まらず、全ての異邦人への祝福と広められたのです。信じるということであればそれは異邦人もできることであり、ユダヤ人だけでなく異邦人も、無割礼のままでも信仰によって義と認められるということでもあります。そこには差別がないのです。人は死ぬことは無差別に來ます。だれもが死にます。同じように、信じることも無差別に恵みとして与えられます。キリストを信じて、救われることはだれでもできるのです。そこで、アブラハムに約束された祝福は、信じている者たちに与えられます。ですから、ガラテヤ地方にパウロとバルナバが宣教していた時に、十字架につけられたキリストを彼らがまざまざと見て、また、力が示されましたが、それらを彼らがみことばをただ信じていたことによって与えられていたのですが、それはすべて、アブラハムに対する祝福の約束が、彼らにも及んでいたということなのです。

3A 律法からの贖い 10-14

このアブラハムへの約束がありますが、それと対比して、律法の下に生きるとはどういうことかを教えます。

¹⁰ 律法の行いによる人々はみな、のろいのもとにあります。「律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わない者はみな、のろわれる」と書いてあるからです。

ガラテヤ人は、信仰だけでなく、それに加えて律法を行うことによって、十分な救いに至ると教えられていましたが、それがいかに誤っているかをパウロは教えています。律法の行いによれば、みな、呪いの下にあるのです。このことは、ユダヤ人自身も薄々分かっていたことです。律法の手を守ることはできないことを彼らも知っていました。だから、そのつながりを単にアブラハムの子孫だからという血縁関係に求め、そこで割礼を受けてさえいれば救われるようというように、調整し

ていたのです。しかし、パウロは直球で、律法の本質を説き明かします。

ここで注意しなければいけないのは、律法そのものが間違っているということではありません。例えば詩篇にはこのようにあります。「1:1-2 幸いなことよ悪しき者のはかりごとに歩まず罪人の道に立たず嘲る者の座に着かない人。2【主】のおしえを喜びとし昼も夜もそのおしえを口ずさむ人。」ここの「教え」とは、律法のことです。したがって、律法そのものが悪いものではなく、主との歩みの中で、神を愛する時に、私たちは神の命令を守ります。主を信じることに生きている者たちが、その中で主の命令を思い巡らし、口ずさむところにある祝福を話しています。ヘブル書 11 章を開けば、実は律法を与えたモーセ自身も、信仰によって生きていたことが分かります。旧約時代に、神に喜ばれた人々はみな、信仰によって生きていました。

しかし、ここでパウロが目指しているのは、「律法を守り行うことによって、神の前に義と認められる」という動機です。この動機によっては、律法は呪いしかもたらされない、ということです。神に信仰によって義と認められた者たちが、御霊によって新しくされ、神との愛の関係でその命令を守るということではなく、神に認められるべく、神の命令を守ろうとするその試みは、呪いにしか至らないということでもあります。

パウロは、申命記 27 章 26 節にある言葉を引用していますが、ここで大事なのは、「すべてのこと」と、「守り行う」の二つであります。前者について、一部ではいけないのです。神の命令について、自分のできる場所だけを守ろうとする、その他のところはおざなりにする、ということであってはならないのです。イエス様が、その部分を山上の説教で語っておられました。ご自身が、律法を廃棄するためでなく、成就するために来られたと言われました。そして、パリサイ派や律法学者の義にまさらないと、天の御国に入ることができないと言われました。そして、彼らが自分たちが見たい目に守り行うことができるように、少しずつ解釈を曲げていることを明らかにしておられるのです。例えば、目には目を、歯には歯をという命令から、復讐してよいというように変えてみたりします。律法を全体として見て、そこにある精髓を読み取って、そして行うというところに立っていませんでした。結局は、神を愛し、人を愛するということに至るのですが、それから逃げていたのです。

そして、「守り行う」ですが、ただ知っているだけではだめなのです。そして「その命令、大好き」と言って、御言葉を愛しているだけでも駄目なのです。「やってみよう」という意欲でもだめです。実際に行っていないといけません。自分が隣人を愛していることを示したかったパリサイ派に対して、イエス様は、良きサマリア人の話を持ちだしました。サマリア人のほうが、ユダヤ人よりも良い行いをしたのです。自分の仲間のユダヤ人、愛してくれる人であれば行っているかもしれませんが、自分たちが敵意を抱いている人には、行っていなかったのです。だから、知っているだけでなく、行いなさいとイエス様は言われました。

でも、だれもがこれはできていないことが分かっている、つまりすべてが呪われている、ということになります。ゆえに、律法によって義を達成しようとしていること自体が、ナンセンス、無意味なのだということをパウロは言いたいのです。それを試みている人たちは、律法の性質について知らないのです。自分の義を求めようとする人は、いつまでも霊的に不満足な生活を営むことになります。同じことを繰り返します。霊的になるつもりで、肉の行いが現れる繰り返しとなるのです。

¹¹ 律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる」からです。

ユダヤ人の聖書そのものに、義と認められることについての啓示があるのです。アブラハムが神を信じて、義と認められたということの他に、「義人は信仰によって生きる」という言葉が、ハバクク書の中にあります。正しい者というのは、律法ではなくて、神を信じ、神の言われたことを信じて受け入れる、その信仰が義とみなされているのだということが啓示されているのです。預言者ハバククは、ユダの国がバビロンによって滅びることについての啓示を受けた時に、極悪の国がなぜユダの悪を裁くのに用いられるのか、さっぱり理解できませんでした。しかし、主は、「それでも待て。遅くなることはない。」と言われて、そして正しい者は信仰によって生きると言われたのです。わたしを信じなさい、それが義人の生き方なのだ。ということです。

¹² 律法は、「信仰による」ではありません。「律法の掟を行う人は、その掟によって生きる」のです。

律法というのは行うことを強調しています。信じること、信仰ではありません。レビ記 18 章 5 節からパウロが引用していますが、律法を行うものは、信仰ではなく、その掟で生きるとあります。

なぜ、律法は信仰によるのではないのか？をもっと考えてみたいと思います。信仰は、神とすることばへの信頼であり、そこには人格的な交わりがあります。生ける神との関わりがあります。この方が言われることを、信頼して、従う心をもって聞いています。これが信仰です。この信頼関係が崩れてしまったのが、アダムが罪を犯した後です。しかし、その後のノアにしても、アブラハムにしても、そしてモーセでさえ、神を信頼して、その信頼が義とみなされていることが、ヘブル 11 章にあります。ところが、その信仰がまだ養われていないところに、イスラエルの民には律法が与えられました。ちょうどそれは幼子が、その本当に意味するところは分からずとも、ちゃんと、これこれをしなさいと言いつけられて、それを守り行っていくのと似ています。

けれども、その子が大きくなって、ようやく親がなぜ、これこれをしてはいけないといった意味が分かるようになって、それで改めて親のありがたさを感謝します。これが、信仰によって生きることと似ています。イスラエルの民は、本当に必要だったのは神への信頼です。けれども、その信頼の前に神が、彼らが国民生活をしていく中で、これを行いなさいとして命じて、その中で、神を信頼

する道を知って行ってほしいと願われたのです。その中で、数多くのいけにえの制度を教えられました。必ず人は罪を犯すものであることを、主は予めご存じで、それで律法の中に、違反者に対する定めをくださっていました。律法の中に、もはや律法は守り行えないということが暗示されていて、それでキリストが必要であることが教えられているのです。このように、これこれを行いなさいという律法が、神への信頼にとってかわることはできないのです。

ところで、信仰には行ないが伴います。行ないのない信仰は死んだものだと言われました。だから、信じれば行いがなくてもよい、ということではないのです。本当に信じていれば、その信仰が行いによって現れます。むしろ、「信じることは大事だが、行いも必要であり、それによって救われるのだ」とするほうが、ユダヤ主義者らが言っていたことに近いのです。神を信じることによって、行いが現れるのであり、信じることだけでは足りない、行いを付け加える必要がある、といっているのは、そもそも、信じていないことになるのです。

信頼することで神に受け入れられているのと、行いによって受け入れられることがいかに不毛であるかを示すために、親子の関係で例えて見ましょう。親に向かって小学校の子どもが、「私は、一生懸命自分で働いて、お父さんを喜ばせます。」と言ったところで、親は「やめてくれ！」と言うでしょう。親が養うことを信じていないのです。自分で働くことで認めてもらふことと、親を信頼することは相容れないことは分かるでしょう。このように、行ないによって認められようとする行為は、神を信じていることにならないのです。むしろ、不信を示していることでしょう。とっとと信頼してください！愛する父の御手の中に自分をまかせてください！そして言われることを行っていくのです。

¹³ キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。

ここから福音です、午前礼拝でもお話しましたが、主語が変わります。私たちが律法を行う話がかかれていましたが、ここから「キリスト」が行われたことです。私たちのために呪われた者となりました。木にかけられて、神に呪われた者になったという律法を、体をもって現わしてくださいました。それで、私たちは律法の呪いの仲、その奴隷状態にいたのですが、解放されたのです。

私たちが、信仰生活全般、そして聖書の読み方、すべてを点検してみてください。主語が誰になっているか？なのです。聖書をよく読めば、「神が」が主語になっているのです。神こそが主権者で、この方が支配され、この方の恵みによって人は生きています。神が私たちのためにしてくださったことが先にあるのです。その神の愛、恵みに応答する形で、私たちが行うことがあります。エペソ書を、ガラテヤ書の次に見ていきます。神がキリストにあつて行われたこと、その祝福が 1 章から 3 章まであります。それから 4 章に、「神の召しにふさわしく歩みなさい」と言われます。ところが、私たちは、罪の性質があり、呪いがあるのです。それは、自分たちが行うことばかりが目につ

まるのです。それで、ああできていない！と嘆くのです。その前に、神が私たちのためにしてくださったことに、どれだけ目を留めていますか？そこから湧いている喜び、感謝、感動、癒し、励まし、それらがあって、それで、「あなたがたはこれこれを行いなさい。」と励まし、勧められているのです。

人間が、自分たちの力で生きなければいけないというのは、罪から来たものです。その罪の性質、肉を律法を使って助長させているのが、ユダヤ主義者らの教えなのです。

¹⁴ それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。

律法の呪いから、キリストが私たちを贖い出されました。その贖い出され、キリストにされた者たちに約束されているのが、アブラハムの祝福でも、御霊が注がれるということなのです。これも午前礼拝で学びましたので、後でお聴きください。そこで、私たちは聖霊による生活について考えてみたいと思います。聖霊の力によって生きる、満たされることについて、どう考えていますか？これだけ神さまに自分が献げているから、それだから聖霊に満たされると思っていますか？それとも、「神の約束だから、信じて受け取る」と考えていますか？後者が正しいのです。ただ、主が賜物として聖霊を注ぐと約束しておられるのだから、そのまま信じて受け入れるのです。そうして、聖霊によって生きます。これを逆に行おうとさせているのが、ユダヤ主義者らなのです。ガラテヤの人たちが、初めの、単純な信仰を忘れて、何か自分たちで律法を行って、それで靈的に優れたものになろうとしていました。

どうか、聖霊に満たされてください。それは、まず十字架に付けられたキリストを見るところから始まります。そこから聖霊の癒しを受けていきましょう。